

第1章『まずは「継ぎたくなる社長像」に向けて土台を固める』

大阪府事業承継・引継ぎ支援センター
統括責任者 兼田 亜貴



「継いでくれる者が現れるとは到底思えない」とは、A社長の大きな悩みです。社内にいる息子さんから「睡眠を削り体に鞭を打って働き続ける社長のような働き方は、自分には無理。」と言われる始末。

日々、事業承継・引継ぎ支援センターにて相談をお受けしていると、「会社を譲渡したが、良くない買い手であった」「従業員に株を渡した瞬間から、態度が豹変し横暴な経営を行うようになった」「会社の財務が火の車なのを知らずに継いでしまった」等、様々な後悔のお話を伺うことがあります。仮に慌てて株を買い戻せても、時間の針はもとに戻せません。

「祖父の代から築いてきたこの事業を終わらせる訳にはいかない」事業承継に絶対に失敗できないというA社長は必死です。後悔しない事業承継のために何をすべきか

一緒に話し合いました。

まず、行ったのが、事業承継の土台固め、具体的には、社長の業務内容の刷新です。社長が抱え込んでいた仕事については、従業員さんを信頼して、どんどん巻き込む、権限委譲するなどして時間を確保、社長としてすべき仕事に専念することをスタートしました。

その後数年が経過し、事業承継のための土台が固まりつつあると、「息子に継いでもらうのも夢ではなくなった」と、A社長の顔は晴れやかになっていました。実際に息子さんと話す機会も増え、一緒に新商品を企画したり、営業や商談に向かう事も増えてきたとか。息子さんによつての「社長のような働き方」は変化し、継ぎたくなるような魅力的な「社長像」になっていったのかもしれない。

理想の事業承継のための準備は長期戦になるでしょう。成し遂げるためには、早期に対策を開始するのが何よりも大切です。当センターを活用して後悔のない事業承継を叶えましょう。

